

フィジーの図書館界におけるコンピュータ化過程 — 歴史的考察と現在の問題点

東野 善男

「研究の目的と方法」

本稿に着手するきっかけは、筆者が青年海外協力隊員(以下、協力隊員とする)として赴任した図書館においてコンピュータ化が進まなかったという経験がもととなっている。

筆者が赴任したフィジー諸島共和国(以下、フィジーとする)には、司書教育を受けた司書がいて、国内にはフィジー図書館協会と呼ばれる組織もある。しかしながら、現場では、図書館でのコンピュータ化のさまざまな問題を解決することは容易ではなかった。

一方、フィジーの図書館界では、これまでコンピュータ化の事例は『*Fiji Library Association Journal*』(June 1992)などで報告されてきたが、コンピュータ化の問題点については依然まとまった報告はされていない。よって、フィジーの図書館についての資料はあまりなく、現地で発行しているフィジータイムズなどの新聞記事やフィジー図書館協会発行のニュースレター(ISSN1016-9997)やジャーナルを基本文献としてあげたい。

日本語での研究の動向(先行研究)としては、途上国の図書館についての総論はあっても、各論(途上国のコンピュータ化など)では見つかっていない。協力隊員の活動一般としては、竹内比呂也「図書館における国際協力—発展途上国への開発支援を中心に」『21世紀の図書館と図書館員』所収(2001年 日外アソシエーツ)が挙げられる。また、英語で書かれた発展途上国のコンピュータ化の文献については、パキスタンのコンピュータ化(S. J. Haider “Library Automation in Pakistan” *The international information & Library review*(1998))などが参考になる。

本稿では、コンピュータ化の歴史過程に焦点を絞り、コンピュータ化の問題点、すなわちコンピュータ化がすすまない要因をまとめてみたい。このことによって、図書館のコンピュータ史をみる枠組みを示すこともできる。

図書館の仕事には先人たちが積み上げてきた図書館学の理論がある。実践をやるためには、理論・研究をすることが不可欠で、理論・研究を实のあるものとして語るためには、バックグラウンドとして実践の知が必要である。また、実践の知恵というのは、実際に人と対話することによって得られる知恵なので、学問だけからは出てこない。だから、得た知恵を学問の世界にきちんと戻さないと学問が実らない。学問・理論と研究、それと実践の統合が大切であると考えている。

① 解明したときどのような社会貢献が期待できるのか。

はじめに、直接的には後輩の協力隊員のサポートになる。将来的には実際に日本人の手で途上国の図書館のコンピュータ化を完成させたい。日本人がうまくコンピュータ化した例を示せば、まだコンピュータ化していない、いわゆる低開発国にとってもプラスになる。そのためには、どうしてできたかを解明すること、あるいはどこでつまづいていたかを解明しないといけない。

次には、一代の協力隊員ではできないプロジェクトであることを説明したい。完成するにはある程度大掛かりな計画が必要であることを文献の形で示したい。今のところその道しるべになる文献も多くはない状態であるので、この研究成果が新しい計画のベースにしてもらえればと思う。

最後になるが、間接的には日本の図書館界にも有益になるはずである。フィジーの現状を日本から客観的に見ることによって、日本の仕事の誤りにも気づき役立つかも知れない。

「論文の構成」

第1章 フィジーの歴史と図書館

第1節 第1期 はじまり

第2節 第2期 イギリス領

第3節 第3期 独立後

第2章 図書館のコンピュータ化事情 館種別

第1節 大学図書館

- (1) 南太平洋大学(USP/University of the Pacific)
- (2) フィジー工業大学(FIT/Fiji Institute of Technology)
- (3) フィジー医学校(FSM/Fiji School of Medicine)

第2節 公共図書館

- (1) 西部地域図書館(WRL)
- (2) スバ市立図書館(SCL)
- (3) ナシヌ地区図書館(Nasinu Community Library)

第3節 学校図書館

- (1) タマブア小学校
- (2) スバ・グラマー・スクール(中学校)

第4節 専門図書館

- (1) フィジー博物館
- (2) ポリスアカデミー

第5節 政府機関

- (1) LSF
- (2) 組織図
- (3) 業務内容
- (4) 活動状況
- (5) 職員体制
- (6) 予算
- (7) コンピュータ化
- (8) 外国からの援助

第3章 図書館のコンピュータ化と司書

第1節 司書教育準備期

第2節 司書教育展開期

第3節 司書教育発展期

第4節 司書教育の果てに

- (1) 地元(Local)の課題
- (2) 地域(Regional)の課題
- (3) 海外(Overseas)の課題

第4章 図書館のコンピュータ過程にまつわる諸問題

第1節 システム構築のステップ

- (1) 第1期 個別業務の機械化
- (2) 第2期 部門別の業務統合化
- (3) 第3期 オンラインネットワークによる全館統合化
- (4) 第4期 他館とのネットワーク化
- (5) まとめ

第2節 書誌データの標準化

- (1) 整理業務のコンピュータ化
- (2) MARC の流通

第3節 コンピュータシステムの分析

- (1) システム分析
- (2) 注意点

第5章 結論と提言

第1節 フィジーにおける問題点

- (1) データの不統一
- (2) 司書のコンピュータ教育
- (3) 計画書の不備

第2節 提言

- (1) 整理業務の集中化
- (2) コンピュータシステムの計画作成

「論文の概要」

第1章では、フィジーの一般史とともに、図書館の歴史をたどっている。

このことにより、フィジーにおける図書館の立場や背景を明らかにしている。その上で、第2章以下、図書館のコンピュータ化の問題を考えている。

第2章では、図書館のコンピュータ化事情を館種別に分けて検討している。

代表的な図書館の歴史と特徴を見ていくと同時に、各図書館のコンピュータ化の問題点も明らかにしている。コンピュータ化過程を館種別に分けることにより、館種毎の図書館員に与えられた役割を明らかにしている。その上で、館種毎のコンピュータ化の課題を考えている。

第3章では、図書館のコンピュータ化を支える司書について検討している。

人がコンピュータ化にとって果たす役割を重要視し、人すなわち司書についての歴史をふりかえっている。司書教育の歴史を通して、人という資源が、図書館のコンピュータ化に与える影響について考えている。

第4章では、コンピュータ化の要素別に見ている。

はじめに、日本における図書館の一般的なコンピュータ化過程を見ている。その上で、書誌データの標準化とシステム分析について詳しく述べている。これらは、要素別にこれまでに見てきたフィジーのコンピュータ化の問題点をまとめる参考となる。

第5章では、結論として、フィジーのコンピュータ化の問題点を3つにまとめている。最後に、これからの課題をあげ、2つの提言を行っている。